



Title	俣野玉川の活動と中井竹山
Author(s)	竹下, 喜久男
Citation	懐徳. 1984, 53, p. 27-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90626
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

侯野玉川の活動と中井竹山

竹下喜久男

はじめに

中井家が播州龍野と関わりをもつたのは、竹山の曾祖父養仙が仕えた信州飯田藩主脇坂安政が、龍野に転封された寛文十二年（一六三二）以降である。大坂町医であつた養仙は江戸詰の医師として脇坂氏から二五〇石を給与されたが、安政の嗣子安照の非を直言して勘気をうけ職を辞したと伝えられている。その子玄端は父とともに藩医として仕えたが、のち宝永三年（一七〇六）大坂に出て町医を開業した。大坂に出た事情については知れないが、宝永三年六十歳を迎えた玄端は隠居を許されたが、老いた父と十代の子供五人を抱えて、隠居後のわずかの捨

は女婿に兄玄端の次男伯元（鳳岡）を迎えて、その子伯元（立昌）には鳳岡の弟常庵の女を迎えて縁を重ねた。玄端の末子常庵は長じて京都の後藤良山に学び、享保元年（一七一六）父玄端とともに赤穂に移り町医を開業したが、玄端は四年後七十六歳で赤穂に没した。その間斎庵は赤穂に父玄端をしばしば見舞い、その途次龍野にも立寄つた。養仙・玄端二代を通じて大坂・龍野は中井家が活躍した主な舞台であったが、斎庵以後懐徳堂を中心に展開される教育活動は、中井家の関係を通じて龍野に文化的刺激を直接与え、他方中井家の活動のエネルギー源の一つが西播から供給されたという意味で、大坂と龍野が深く関わったといえよう。

本稿においては主に十八世紀から十九世紀初めの西播の状況を龍野藩儒侯野玉川の教育活動を中心として明らかものである。龍野藩医は玄端の弟玄意が継ぎ、玄意

かにし、その中で竹山とこの地の知識人の交流が如何にみられたかについて考察を加えたい。

(一)

近世前期の西播の文化を語るとき、多く藤原惺窓、山鹿素行から説かれるが、惺窓は美嚢郡細川荘の冷泉家に生まれ、幼くして出家し、衆庶の帰依の篤かつた龍野景雲寺の昊東明長老の弟子となり、約十年間この地で修行僧として日々を送ったものであり、山鹿素行は賓師として赤穂浅野氏に遇されたとはいふ居の身で十年滯在しており、両者とも西播の地で広く知己をもつて文化的刺激を与えたといえるものではない。

近世前期の西播において忘ることのできない人として藤江熊陽（忠廉、一六三〇—五三）がある。熊陽は赤穂中村に生まれ、二十一歳のとき上洛して古義堂に入門している。熊陽の入門と前後して花岳寺僧大拙・赤穂藩医沖芳庵の養父にあたる玄旦・前川又左衛門、龍野周辺では坂根正伯・横田喜内ら十数名が相次いで古義堂を訪ね、また後藤良山・山脇玄脩に医術を習うものが少なからずあり、西播の地に京坂の学問を学び吸収しようとする気運が高まっていることを窺わせる。

熊陽はその学識をもつて脇坂氏に迎えられ龍野藩儒として一五〇石を給与された。熊陽の学風は「先生学該唯在道德仁義何必彼此争弁」と五井蘭洲が評しているようには必ずしも学派に固執せず、道德仁義の実践履行を専ら重んじるものであり、門人を導くに懇切を極め、各人の能力を發揮させることに努める度量ある人物であった。熊陽は元文五年（一七四〇）衣笠明親が稿を草した「龍野志」を監修している。序によれば明親は「其所輯錄不散無稽之言遍考閱旧吏檢計群書參考叢說以成一編、至其賦稅貢獻姑舍諸蓋封内素非無古籍、然其書頗多異說怪妄不可不弁別、是以其疑者芟之略者詳之」と群書を涉獵參看して明らかにした地誌は「凡如此編所載雖似無益于日用亦寒致知格物之一端也」と自負したものであった。このような衣笠明親の知識を究めて地誌を明らかにしようとする学的態度に熊陽が共鳴して「刪其外語補其闕略」し、すすんで藩主に献じたところ「君侯善不俟駕而巡察封内之意」と地誌の出来栄えを称し、山瀬某に謄写させたという。熊陽はそれ以前に「播州赤穂郡志」（享保十二年成稿）を編集している。これは郡内の庄郷、領主、城廓、町割、川筋、道筋、古城、古跡、神社、仏閣、土

産、風俗についてその沿革ばかりでなく、多くの部分について現状を踏査しなければ知り得ない詳細な記述がみられ、土産の製塩についても現場で具に見学し、種々確かめた結果を記していると思われ、熊陽の学風を示しているものといえよう。熊陽の周辺にあって教えをうけた人には五井蘭洲・中井斉庵・三宅正誼・中井竹山・中井履軒・安達珍英・古林相如・藤江軍治・侯野玉川・一瀬明善・松尾維則・南木行義・武藤元志・三輪好之・横山直道・平井惟允・松本維敬など上方あるいは周辺諸藩の藩儒・藩医として活躍した人だけでなく、在野で文筆・教育に携わるものがあり多方面の人材を育てたことが知られる。熊陽の八歳年少で同じく龍野藩儒であった侯野龍溪（貞七）も、宝永六年七月熊陽が同道して京都に東涯を訪ね、のちその才を認められて藩費による遊学を許された。龍溪についてはその後龍野の人南木玄泰・津守元道・梅村梅庵・石川立軒などを古義堂に紹介したことが知れるが、それ以外に注目すべき動静は窺えない。宝曆二年（一七五二）十月熊陽は湯治先の有馬温泉で六十九年の生涯を終え、龍溪も同五年六十六歳で逝き、一つの時代が終つた感がある。

赤穂藩では三日月藩医船曳道益の次子良平（滄洲）が

元文四年（一七三九）藩医大川氏の養子に迎えられ、京都で香川修庵・宇野明霞に師事し、二十七歳で藩儒に登用され氣を吐いた。滄洲は宝曆十三年四十三歳で隠居を許され上京し、皆川淇園・柴野栗山と三白社を結成し得意とする詩文を通じて活躍し、西播の地においても独自の文学の風を醸成した。滄洲とほぼ同年代で西播地方を中心として活発な教育活動を開いた人に、侯野玉川（龍溪の子）・藤江龍山（熊陽の子）がある。

(二)

宝曆期以降龍野を中心とした教育活動と知識人の交流の動向を侯野玉川の日記「幽蘭堂年譜」によつて明らかにしたい。

侯野玉川（一七三〇～一八〇六）は、当時すでに「脇坂に過ぎたるもののが二つある。侯野才助、貂の皮」と、藩主脇坂氏の槍印の貂の皮とともに五万石の大名の抱える儒者としては分に過ぎた人物であるとの評価があつた。玉川は藤江熊陽の下で和漢の教育をうけ、熊陽あるいは父龍溪が主催する内講・文会・詩会に参加し、輪講にも加わり和漢の書を広く読んでいる。このような玉川の学習の成果を問う如く、寛延元年（一七四八）四月將軍家重襲職奉賀の朝鮮

通信使一行と接する機会を得た。通信使の来航について、人びとが宿所を訪ねて漢詩の唱酬に歎をつくし、書画の揮毫を請い、筆談によって中国・朝鮮の政情や歴史・風俗を尋ね、経史諸学の問答を交わした。一部にはこのよくな通信使文人との接触、交流を一代の榮誉として誇る風さえ生んだ。玉川は子ねて使節文人との唱和に関心を抱き、懲毖錄・鮮明官職考などの他、唱和記録を集めた和韻唱酬集・問撫崎賞・鶴林唱和集を読み、その機会を待っていた。寛延元年四月十八日対州儒者阿比留太郎八・大浦益之進を介して、室津において使節中の学士、正書記、從書記との詩の唱和に成功した。終って二十日登城の命をうけ、玉川は年寄部屋で使節一行の様子と唱和の次第、さらにその詩を詳しく披露に及んだところ、その詩を在府中の藩主の一覽に供するよう言い渡され、若冠十九歳の玉川は改めてその才を認められることになつた。一行が寄港する室津に極めて近いことも利したであらうが、玉川の日頃の意欲の一端を示す事件であったといえよう。

玉川の学風は師熊陽、父龍溪を通じて古義堂の影響をうけたと考えられるが、宝暦五年父の業を継ぎ、諸学者

との盛んな交流を通じて自らの学間に疑問を抱き、三宅尚斎の門人で子ねて私淑していた玉田黙翁の門をたたき三ヶ月間教えをうけた。これがその後の玉川の生き方でどのような意味をもつたか具体的には知り得ないが、自己省察を重んじ、養徳のための手段として持敬、窮理を位置付け説く黙翁の教えは、玉川に何んらかの新しい刺激を与えたにはおかなかつたであろう。

七〇俵三人扶持を給与された玉川は、宝暦五年以後藤江龍山とともに侍講として四書を講じ、安永元年(一七七二)には幼君安董の手習指南、四書五経を講じる任が加えられた。藩士教育の場である対面所講釈は月六回を原則とし、宝暦七年享和期には玉川・順軒父子、藤江龍山・岱山父子、石原順蔵・溝江新吾らが交互に担当していた。これらの講釈は藩儒としての職務で行なつた講釈であるが、その他に藩士の個別の要請により私的に催した講会がいくつかある。三五〇石以上の禄を給与され、藩政の枢要の地位を占める四、五名のものに、貞觀政要などをテキストとして月六回夜行なわれたもの(三・八夜会寛政末年~享和元年末)、百し二百石取の藩士三・七名が論語講釈を聽く会(四・九講 寛政五年六月~同六年末)、一〇年間に涉り孝經・論語・中庸・小学・古文真

宝後集を講じた会（六・六講談 寛政三年～享和元年十
月末）、二人の藩士の希望で行なった近思錄講釈（十日講
寛政十年十一月～享和元年十一月末）、二人の藩士に大
学・中庸・易經について行なった講釈（九日講、寛政七
年一月末～十二年四月）、閑覚兵衛ら三人の懇請により
行なった論語・大学講釈（二・七朝会 寛政十三年一月
～十一月末）などは、玉川の居宅で催した私的な講談の
会で、比較的気楽に学問上の討論をし、会の後には雑談
に興じることもあつたであろう。

玉川はこれら以外に龍野周辺の土庶の子弟を自宅に集
めて手習、読書教授をしていることが注目される。自宅
におけるこの教育がいつから始められたか明らかでない
が、安永二年以降孝經輪讀の記事が日記に頻出し、同四
年には読書入門生の名がみえることから推して遅くとも
安永期には始められていたものと考えられる。この時期
西播地方で庶民教育を担う寺子屋がそれほど普及してい
たとは考えられず、藤江龍山の叢桂館とともに玉川のこ
の幽蘭堂は数少ない庶民教育の場であった。それだけに
地域的にかなり広い範囲から入門者があり、縁者に宿
泊したり、侯野宅に寄宿するものもあつた。入門者が比
較的正確に知りうる寛政三年～文化三年の十六年間に一

九九名の入門者があり、その内身分の判るもの五九名に
ついて内訳をみると僧侶二七名、藩士二一名、医者六
名、村役人五名となり、全体の三分の二以上は町人、農
民の子弟であつたと考えられる。在塾期間については推
定して平均二～三年ではなかつたであろう。

明和八年（一七八一）九月玉川が初学者の学習一般につ
て心得を説いたものに「入門規矩」がある。これを基に
して寛政三年十月幽蘭堂の学規が定められた。いかにも
初学者向けに具体的に一六条にわたり堂の内外における
行儀作法と学習について注意したものである。「公儀之
御法度ニ背申間敷事」の箇条の前に、平生の行儀、父母
への挨拶、兄弟間の和睦に関する三か条があり、毎日の
復習についての注意など併せて日常性に富んだ教育内容
を推察させるものである。寛政三年九月藩主安藤が寺社
奉行となり、その際改めて家中が武芸・文字を専らに
し、風俗を糺すよう令しているが、このとき藩の文教を
すすめる任を担う玉川が、幽蘭堂の学規を改めて定めた
のは領けるところである。

寛政六年閏十一月から四書、小学の輪講を八人前後の
有志が幽蘭堂で行なっているが、これには読書生の陪聴
が許されており、一応の読書を終えた子弟が一層の学力

をつけるための会であったようで、将来村々の子弟教育にあたる人材の養成課程としての意味をもつと同時に、のちに述べるように上方などに遊学しようとする者が進学の足がかりを得るものでもあった。

以上みたように幽蘭堂が西播地域の庶民教育に重要な役割を果すと同時に、その地域に止まらず他との文化交流を担う人材も育成し、また東へ上り西へ下る知識人が立寄り、この地に文化的な刺激を与える拠点の役割をもつていたと考えられる。さらに玉川自身が江戸藩邸に勤めている期間に広く他藩の知友と交流を深め、その成果を幽蘭堂を中心としたさまざまの催しを通して伝えていることも注目されるところである。

(3)

「幽蘭堂年譜」に記録されている江戸における玉川の交友の一端を寛政四年の記事から窺つてみた。

玉川は寛政四年六十二歳の春、藤江龍山・中井伯元と交代のため江戸へ出立するに際して、門弟ら十余名が揖保川の川原で桃の花見を兼ねた送別の宴を催し、即興の詩を作つて楽しんだ。当時隣村の阿曾村で医療修行中の玉川の三男恭蔵は玉川の世話を係りとして同行することを

許され、玉川らの一行十数名は三月十八日江戸に着いた。玉川の江戸における勤めは芝上屋敷歌仙之間月並表講釈を四・九の日に勤め、その他三・八の内講、さらに林田藩主建部氏の求めに応じて二・七日に出講する以外は比較的時間にゆとりがあった。その間を利用して他出し、知己を訪ねることができた。八月から十二月までの知己の交流の主なものを「幽蘭堂年譜」から拾つてみよう。

八月五日 本多淡路守邸に石原樂山を訪ね酒盃 連管を聞く。「風流なる事共也」

八月十三日 中井竹山來訪。「大坂学校類焼ニ付願筋有之候而罷越候由噂也」

八月十四日 家中同輩十人余と賞月小宴、詩歌俳諧若干。

八月十五日 堀田豊前守(近江 宮川) 下屋敷に山辺良川を訪ね、酒を出される。

八月十九日 中井竹山次男七郎来訪。

八月二十日 石町三丁目横町中井竹山寓居を訪ね嘆す。「石井文治・田中順治・山岡勝九郎・福井主一郎并門弟伊三郎皆々相識ニナル」
八月三十日 八重洲河岸の井上仲龍(岡山藩儒)を訪ねる。

九月一日 竹山の旅宿を訪ね、酒肴出る。

九月十日 竹山來訪、竹山懇意の赤崎源助（薩摩藩儒）・山辺良川を招き酒飯を出す。

九月十三日 竹山の寓居を訪ね、明後日朝出立とのことで緩々語る。帰途井上仲龍方へ寄る。

九月十五日 赤崎源助來訪。

九月二十日 山辺良川來訪。

十月二日 市谷細井平洲宅を訪ねる。

十月十二日 夕飯後聖堂へ行き尾藤二洲を訪ねる。

十月十五日 玉川の息恭蔵平洲宅の詩会へ行く。

十月二十日 芝薩摩藩邸へ赤崎源助を訪ねる。

十一月五日 土佐藩邸に藩儒箕浦江南を訪ねる。霞関

広島藩中屋敷に頼弥太郎（春水）を訪ねる。

十一月十五日 中津藩邸に藩儒倉成善司を訪ねる。

十二月十五日 赤穂藩医生淮田長民來訪。

十二月十六日 岡山藩邸に近藤西涯を訪ね、土佐藩邸に箕浦江南を訪ねる。

十二月二十三日 箕浦江南來訪。

十二月二十六日 赤穂藩淮田長民・神吉耕庵來訪。倉成善司來訪。

五月大坂の大火灾で懷德堂を焼失し、中井竹山は再建を

幕府に願い出るため江戸に下り一ヶ月滞在していたが、その間多忙な時間を割いて玉川と往来していることが知られるのをはじめとして、江戸詰の岡山藩儒井上仲龍、仲龍と親交のあった近藤西涯、晩年柴野栗山に認められ頼春水らと共に昌平校講官に登用された藩摩藩儒赤崎源助、江戸・大坂に知己を多くもつ土佐藩儒箕浦江南、古義堂に学び昌平校にも出入し細井平洲と親交のあった中津藩儒倉成龍渚、さらに頼春水・細井平洲との往来の状況が窺える。他に玉川が親しく交わった人には高山彦九郎・尾州二洲、松平定信の信望を得て麹町に宅地を与えられ辯麴舎（麹溪書院）を設けた服部栗斎、平洲門下でもっとも傑出した弟子と称された久留米藩儒樺島石梁・岡田周三郎らがある。なかでも高山彦九郎とは格別親交を重ねたことは彦九郎の日記にみえる。

このような江戸における玉川の広い範囲にわたる直接的な交友関係は、玉川にさまざまな刺激を与えずにはおかなかつたし、それはまた玉川の国元における活躍に多くの活力を与えるものであった。

玉川の龍野における動きのなかで、門弟や周辺の知友、あるいは遠来の賓客を迎えて、しばしば詩会を催していることが注目される。この種の会は打ち解けた社交

の場として、地域の知識人の交流に大きな意味をもつてゐたと考えられる。

桃・芍薬の花見・納涼・七夕・仲秋・重陽・冬至の定例の詩会、その他追悼・年賀や来客を迎えての臨時の詩会が少くない。この他町人らが詔会・歌会をさかんに催しており、玉川がその席に招かれたこともあった。玉川は自らが主催する詩会について案内した人、欠席した人、遅参した人を逐一日記に記している。寛政八年十一月二十三日の冬至詩会には五十四名を案内し、四十二名の参加を得て盛会であった。案内先は同輩の藤江龍山・南木佐寿をはじめ玉川の教えをうけている藩士、和田春堂・円尾玄東・松尾玄長・満田純耕など上洛して医術を学び帰国したもの、玉川宅に寄宿し勉強中の姫路藩領辻川村大庄屋の辻三木東作、林田藩領東保村小野勇蔵など年齢・身分の異なるものが一堂に会して即興に詩を賦し一刻の楽しみを共にすることは、講釈・輪説などの会にはみられない寛いだ雰囲気を作ったと考えられる。

(四)

竹山にとって龍野は父祖の地であるだけでなく、鄧庵以来龍野藩から扶持米を給与され、藩主帰国に際しては

伏見まで出迎えるという公的関わりをもつていた。しかし扶持米支給は藩の勝手向不如意のため当時は名目だけで「一粒も渡り不申」、寛政元年大坂城代から大坂城召抱えの沙汰のあつたのを機に龍野藩の扶持米を辞退し、一応公的な関係は断たれたが「從來格別之御由緒を得候私義ニ御座候へハ、御家出入之義ハ是迄之通」許されたいと願い出ている。また寛政十二年正月竹山は蕉園・碩果の二人の子息に宛てた遺状の最後に「龍野之親戚代を重ね候ニ隨ひ相互ニ次第ニ疎遠ニ成行可申候、家之追遠薄ニて譜系瓜葛を折々考へ先壠之所在を能諳し置、年歳之文通、又ハ吉凶ニ付聊之信物等末長く懇懃を通し可被申候」と龍野中井家との関係を軽んじることなきようによ子孫を戒めていること、さらに寛政七年懷德堂再建工事に際して大工三人、戸障子細工一人を敢えて龍野から呼び寄せ棟梁を助けさせている点などに竹山が龍野へ格別の思いを寄せていたことが知れる。龍野に活躍する人たちと竹山は具体的にどのような交流をしたであろうか。

竹山・履軒と玉川・龍山は既述した藤江熊陽の兄弟弟子であり、ことに竹山と玉川は同じ享保十五年生れであることもあり格別の親交があった。玉川の交友の広さに

も竹山が閑わつた部分が少なくなつたようと思われる。竹山は安永元年四月江戸に下り、喰館に細井平洲を訪ね、その後交友を続いているが、このころ江戸に滞在

していた玉川は平洲に紹介され、さらに平洲に入門して間もない高山彦九郎を玉川が知るところとなつた。

丁度この時期龍野藩は領内外の銀主への借金も行き詰り、さらに安永七年二条大納言江戸参向の幕府御馳走役を藩主安親が命じられ、その費用調達のため藩財政は破局的場面を迎えた。翌年二月藩は当面の財政難打開の方策を家中から広く求めようとした。その際予ねて陽明学を信奉していた国枝順太夫は藩政府中枢人事の刷新を藩主に直訴しようとしたが、逆にその行動に疑惑をもたれ順太夫は自殺するという事件があった。この事件で藤江龍山・岱山父子、玉川・順軒父子にも嫌疑がかかり、「役柄之義心付候義ハ申出も可仕候ヘ共、国枝順太夫なと同様之存意ニ候哉、其程御不審ニ思召候、惣而御政道之義ハ上々被仰出、尚又役人共打寄御取扱有之候処、差出候様ニ思召候」として差控を命じられた。龍山は奉行役を免じられたが、玉川は八日間の差控という軽い処分ですんだ。

竹山はかつて順太夫が熊沢蕃山の書について質問した

際、蕃山は経義の解釈に難点があり、徳は中江藤樹に譲る面はあるが「偃武以降実徳実才実学ニテ、國家ノ実用ヲ施シ候人、外ニ匹敵アルマジク候、愚拙ナドモ兼テ景慕欽仰は深ク候」と竹山は蕃山の実徳・実才・実学を高く評価しているが、順太夫が国家の実用を施そうとし、玉川らも同調した右の事件に竹山が同情を寄せるところがあつたと考えられる。また高山彦九郎も日記にこの事件を記して関心の程を覗かせている。

藤江龍山が竹山にしばしば書を呈し、それに答える形で竹山が自らの学問を龍野の知識人たちに伝えているその一端を「竹山国字贋」に窺うことができる。書簡には習字の基本を説き「諸家ヲ錯綜シテ千変万化ノ内ヨリ習熟運用シテ一機軸ヲ出シテ終ニ一家ヲナスヤウアルベシ」と教えたもの、あるいは寛政十年七月雷火により焼失した方広寺大仏の再興を企てるとは如何に愚であるか、かつて「草茅危言」で論じた寺院無用論に沿つて具体的に述べたものがある。龍山が学問の心得について問うたのに答えて「經書ノ研究ヲ主トシテ、其余力ニ諸書ニ涉ルヘシ」とし「經書ニ於テ尤モ切要ナルハ、四書・詩・書・易ナリ、平生コノ内ヲイヅレナリヒ一部ヅ、本業トシテ日々ニ読デ、ソノ末書ヲセングリ一色ツ、カケテ読

ベシ、畢レバ又始テ循環スベシ（中略）コレヲ立ヲキテ、サテ諸子モアマサズ渉ソテ、本業ノ力ヲ以テソノ得失ヲ弁ズベシ、然ルトキハヨク博ニシテ雜ニ落ザルベシ」と

初学者へ忠告し、また経術と文章は一体のものとして学ぶべきで、文董家は韓愈・柳宗元・歐陽修・蘇軾を範とすべきであり、明の方正学・王陽明とも一代を圧倒した文宗として必読の書であり、「我邦ノ集ニサシテ読ベキモノナシ」としながら「ムツト日本臭キ」を離れている点で「文筆ノ品題ハ何ト云テモ物氏第一ナルベシ」と徂徠を推奨している。書簡中に「予ノ大ニ憎ム所ハ陽明ノ學術ナリ、サレトモ陽明ノ文ヲヨムタビニ擊節シテ称スレバ、コレソノ人愛憎ニヨリテ其文ヲ取捨スルニ非爾事明白ナリ」として前述の経術と文章は一体とする説明から理解しにくい部分もみえるが、右にあげた言は「大言不遜ノ甚シキモノアルニ似タレドモ」「足下ト老夫トノ間ニ於テ、サシテ忌テ隠黙スベキホドノコトモナケレバ」気軽に見解を述べたものだとしている。このような書簡を通して、あるいは直接的に竹山の教えるところは龍野の知識人に影響を与えたであろう。その具体的な表れとして玉川が幽蘭堂で教えた子弟のなかに懐德堂へ入門するものがあった。「幽蘭堂年譜」には玉川の門人で

長崎・上方に医学修行のため遊学するものが十数名あるが、他に懐德堂に入門したことが明らかなるのが二名ある。

東保村の農家の出身石野重蔵は、寛政九年二月「好学之由」をもつて十四歳で幽蘭堂に入門し、五年間玉川の教育をうけ、享和二年（一八〇二）七月大坂の叔父宅に寄留して懐德堂へ入門することを希望した。玉川は壮行の盃を交わし、絶句三首を贈り前途に期待した。翌三年四月重蔵は林田藩から二人扶持をもつて藩校敬業館の儒官見習に召抱えられたが、懐德堂における勉学の継続は許された。横山正吉（千之）は寛政九年六月幽蘭堂に入門し、翌年には二・七の論語輪講で前講を勤めるほどになり、石野重蔵に続いて懐德堂に入門している。幽蘭堂への入門は明らかでないが、祖父元秀以来龍野藩医として抱えられていた小西惟沖（純達）は、父啓廸と共に竹山・履軒の学風を深く敬慕するところがあり、竹山・履軒の著述の大半が啓廸・惟沖父子によつて丁寧に筆写されたものが現存している。

以上俣野玉川の活動を通して西播の教育・文化環境の一端を概観し、そのような環境作りの中心となつた玉川の学風、交友に竹山の関わりが少なからずあつたことを

指摘した。竹山の学風がこの地に如何程影響を与えたかを示す端的なものは懷徳堂への入門者があるが、現在知れるものは極めて僅かである。しかし龍野でも藤江龍山あるいは小西啓廸・惟沖父子の門弟で懷徳堂に入門したものが可成りあつたことが当然考えられ、今後これらの人がびとについての研究を通じて、より具体的に懷徳堂の教育と地方の教育・文化の相互関係を明らかにすることができるであろう。

註

① 「藤江忠廉墓誌銘」 五井純頼撰

(仏教大学教授)

- ② 玉川の日記「幽蘭堂年譜」は延享三年九月から死の直前の文化三年六月二十九日にいたる六十年間の記録である（龍野市立図書館所蔵）。その大部分は「幽蘭堂年譜」（大谷女子大学資料館報告書）第三、四、六、九冊として公刊されている。
- ③ 「懷徳堂記録」（大阪大学付属図書館所蔵）
- ④ 「年譜」（東海市史）資料編 第三卷 新編細井平洲全集
- ⑤ 「幽蘭堂年譜」 天明二年二月十九日
- ⑥ 「竹山国字牘」